

Uターン就農・・・我が家の場合 その2

「慣れたら楽しい仕事?!

畑作農家（十勝・清水町）

森田 里絵

◆どういう風に楽しんでいる?」

二〇〇四年の春、主人の実家である十勝管内の清水町に、二人そろってUターン就農した私。

就農当初は会う人会う人から、

「初めは大変かもしれないけど、農家は『慣れたら楽しい仕事』だから頑張つて!」と優しく言葉をかけられる。「そうですか。頑張ります!」とあいまいな微笑を浮かべて返事をしたものの、内心では「慣れないと楽しい仕事なの? いったいどれくらいたてば慣れるの? どういう風に楽しいの?」と不安がいつぱいだった。

◆体力のなさに涙・・・

五月。種まきや苗の定植など、畑作農家にとっては一年を通じて一番忙しく労働時間が長

い季節だ。

「肥料袋三〇個、軽トラックに積んどいて」「ビートの苗箱を運ぶよ!」「豆のタネ袋あるかな? 持ってきて!」・・・「わかりましたあつ!」

子どもの頃から返事だけは良い私。が、しかし。二〇kgの肥料袋はなんとか持ち上げてよちよち歩きができたが、約二五kgのビートの苗箱はかろうじて持ち上げられるだけ、三〇kgの豆のタネ袋に至っては、びくとも動かせない。「運べませーん・・・」自分がいかに非力であるか思い知らされる。

こんなふうには体に鞭を打ちながらがむしゃらに動いていくと、当然ながら体中が筋肉痛になる。天気が続けば何日でも動かなければならない。週休二日に慣れた体では、五日続けて

森田 里絵 (もりた りえ) さん



清水町 農業

1968年 長崎県生まれ

京都大学農学部卒

1990年 北海道庁入庁

胆振支庁、道農政部、環境生活部などを経験

2001年 哲也氏と職場結婚

2004年 退職し、清水町でUターン就農

現在、経営面積 33畝

栽培作物：小麦、ビート、小豆、大豆、手亡、ジャガイモなど

働くこと「休みたい・・・」と体が悲鳴を上げ始める。ゆっくり体を休める暇がないので、筋肉痛はずっと治らないままだ。

「いったいいつになったら『慣れて楽しい』と思えるのだろうか」「空を見上げてため息をつく。

◆除草のプロフェッショナル

六月になって、一番大変な作業は草取りだ。

「除草剤を使えばいいじゃない。」そんな声を聞く。でも除草剤はそれほど万能ではない。

特に豆類は、除草剤の影響を受けやすいので生育途中では使うことができない。一般的には播種直後に土壌処理剤を一回まいて、そのあとは「カルチベーター」と呼ばれる機械で畝(うね)間を除草し、それでも

とりきれない株間を「手」で除草する。手といっても、腰をかがめて一本ずつ草を抜かなくてもいいように「ホー」という長い棒の先に刃のついた道具を使う。このホーを巧みに操り、豆の株元の土をかきまわすことで、芽が出るか出ないかの時期の小さな雑草を外に出し、乾燥させて撃退するのである。

「こういう感じでやるのよ」説明しながらスーツ、スーツとホーを走らせていく義母の姿はみるみる遠くなる。

「エーッ」と思いながら、見よう見まねでホーをかきまわす。「ブチッ」案の定、雑草ではなく豆の莖を思いっきり切ってしまう。「どうしよう、減収だ」と悩んでいてもキリがない。結局最初の二列の除草が終わるのに二時間以上かかっ



小豆の芽生え



豆の除草



成長してきました

た。終わるころには首も腕もパンパンに張っている。

この広い畑にいったい何本の豆があるのか。気が遠くなる。試しに計算してみると、長さ二五〇m、幅二二〇mの面積三畝の畑として、豆の株幅二二cm、畝幅六六cmで植えた場合、一畝に約一、一四〇株の豆があり、畝が一八一本あることになるので、かけると約二〇万株の豆が植えられていることになる。ホーは豆一株につき、両脇と株間の三回通すので、合計で約六

〇万回除草を行うことになる。うちの農場の豆の面積は約八畝で、平均二・五回の除草を行うので、一年間でホーを入れる回数はトータルで約四〇〇万回という計算だ。

これだけの回数をこなすわけだから、やっているうちになんとなく動きはさまになってきた。しかし、除草を終えて一週間後にもう一度畑を見てみると、ものの見事に一列おきに雑草が生えている。要するに、義母が除草した畝にはほとんど雑草がな

く、私が除草した畝だけに雑草が生えているのだ。「同じようにやっているつもりなのに、なぜ？」さすが、四〇年近く除草を続けたプロフェッショナルは違つ。ホーをまるで自分の指先のように扱い、豆の株元ギリギリまで攻めて細かな雑草も見逃さない。これから先の人生で、私も何千万回ホーを入れることになるかわからないが、一回ごとに「どうしたらきちんと草を除けるか」と、頭をひねりながらやっている。

◆作物への「親心」

こうしてしつかりと除草を行った畑は、見とれるほど美しい。自分が蒔いたタネだと思つと、余計にいじらしく、可愛い人間でも幼児は弱い存在であるのと同様に、作物も小さいうちはさまざまなものに弱い。宮澤賢治風にいえば、「雨二モマケル。風二モマケル。寒サ二モ暑サ二モマケル。虫二モマケル。病氣二モマケル。雑草二モマケル。」といったところだ。どん

な手段をとつても、これらの外敵から自分の作物を守り、収穫まで大切に育てたいという気持ちがいってくる。

北海道開拓の歴史の中では、イナゴの大群が農作物を襲い全滅させたという悲しい過去がよく語られる。農薬を使うようになってイナゴの被害はなくなつたというが、もしそのようなことがあれば私は耐えられない。

そんなことを思ううちに、単なる消費者だつたときは多少抵抗のあつた農薬もそれなりに受け入れられるようになってきた。たとえるなら、自分の子どもが風邪をひいたときに風邪薬を与え、インフルエンザが流行しているときに予防注射を受けさせるといふ親心。農家が農薬を使うのには、それに近い感情があ

ることを初めて知つた。

もちろん、風邪を引かないよ
う丈夫で元気な子どもを育てればいいのだが、実際はそううまくはいかない。気象条件によつて発生する病害虫は異なり、中には致命的なものもある。農家の場合、作物に対しては「愛情」にさらに「経営」という二倍の期待がかけられるから、リスク管理には敏感にならざるを得ない。

世の中的には農家が農薬を使うのことに對して「環境意識が低い」「消費者を危険にさらす」といふ批判的な意見がある。ただ、そういう意見の中には農薬のことをよく知らないことから生じている誤解もある。たいていの農家は、作物への「愛情」が基本にあつて、できるだけ残留のないように農薬を選んで使用し

ていることをもつと多くの人に伝えていく必要があると思う。

また、有機農業にとりくんでいる農家に対してさらなる敬意も感じるようになった。土をつくり、健康に作物を育てるための技術力をもつと学びたいと思う。逆に、有機農業を志す若者たちと話す、慣行栽培の農家を極端に嫌う傾向を感じる。しかし、「作物を健康に育てる」という基本はどんな農家も同じであるのだ。無理して垣根をつくる必要はない。

◆慣れてくると面白い！

就農して三年目を迎えると体力もついできて、今は筋肉痛に悩まされることはなくなった。肥料袋は遠くに投げられるし、豆のタネ袋を抱えて歩くこともできる。晴れが続いて十日休み

がなくても忘れていた。ホーで間違えて豆を切ることも少なくなった。人間は鍛えると変わるものだなあとつくづく思う。

自分の体が鍛えられるのと同時に、作物の健康状況がだんだんわかるようになってくる。自分で作物のことを考えながら取り組んだことは何かしら伝わる気がする。それが良い方に作用すると、本当に嬉しいものだ。もちろん確実なものはないが、まだまだ簡単にいかないところも面白い。

なうら、ときどき「ほら、このように自家用の新鮮な野菜を味わえるのも魅力だ。私はやっぱり「花より団子」、美味しいものを食べると、キツイことも忘れてしまう。そう、ほんとうに「農家は慣れたら楽しい仕事」よ！